

吉蔵における見性思想の考察

栗谷良道

(一)

見性思想が禅宗において重要な問題として強調されていることは言うまでもない。禅宗の見性に関する研究として、古くは、常盤大定博士の「見性の思想的考察」⁽¹⁾があり、近年では、鈴木哲雄氏の「荷沢神会の見の思想」⁽²⁾、「荷沢神会より壇經に至る見性の展開」⁽³⁾などがある。

見性思想が禅宗における重要な思想であることは周知のことであるが、これらの論文はいずれも禅宗関係の資料を中心とした研究であり、禅宗で説く見性思想の成立過程については何ら言及されていない。この問題について、柳田聖山氏は著書『初期禅宗史書の研究』の中で「曹溪慧能の見性説の如きも、如何に独創的であったとは言っても、南方における仏性論、及至は涅槃教学の地盤なしには、決して生れ得なかつた筈である。……中略……とにかく南宗の教学的基礎は北宗

の楞伽主義や華嚴思想よりも、涅槃教学の仏性論に、より大きい影響を受けていると言えるのでなからうか。」^(一六六一—六七頁)と述べておられ、南方涅槃教学の影響を指摘されている。また平井俊栄博士は、論文「神会語録と本有今無偈論」⁽⁴⁾の中で、神会や慧能の禅思想に影響を与えたとされる南方涅槃教学の実体が何であるかについて論及されており、結論として三論学派の影響が指摘されている。⁽⁵⁾

すなわち、このような指摘を考慮するとき、見性思想の研究には吉蔵教学の研究が必要課題であると考えられる。

(二)

見性思想を述べる場合、神会あたりを最初とするのであるが、⁽⁶⁾神会以前にも見性が説かれていることはすでに指摘されている。⁽⁷⁾

中国三論宗の大成者嘉祥大師吉蔵の説く見性思想について

は以前に論じたことであるが、⁽⁸⁾著書『大乘玄論』中には「見性門」という項目があり、見性が論じられている。『大乘玄論』中の「見性門」ばかりではなく、吉蔵の他の著書においても見性の用例をみいだすことができる。二、三の例をあげるならば、

- (1) 十地已還見仏性未明法身未現故不得授。見性明了法身顯現記也。(法華玄論卷第七、大正三四・四二〇下)
- (2) 涅槃經出。一切衆生皆有仏性。悉当成仏。要令持戒。然後見性。(勝鬘宝窟卷上之末、大正三七・二〇中)
- (3) 慧眼未必見仏性如九住已下仏眼見性故有故有境也。(大品經義疏卷第三、統藏一—三八—三七七左上)

といった用例をあげることができる。これらの例をみるかぎり、見性とは見仏性の意味であることが理解される。このうち、(2)の『勝鬘宝窟』に説かれている例をみると「涅槃經出」とあり、『涅槃經』に典拠を求めている。すなわち、『涅槃經』卷第七「邪正品」第九には、

云何當得見於仏性。一切衆生雖有仏性。要因持戒然後乃見。因見仏性得成阿耨多羅三藐三菩提。(大正一一・六四五下—六四六上)

とあり、見性が見仏性の意味で述べられていることが理解される。吉蔵著書中、見仏性という言い方はかなりの回数で用いられており、吉蔵において重要な概念であることが理解さ

れる。

ところで、吉蔵はまた、『中觀論疏』卷第五末において、如經云。明與無明愚者譜二。智者了達其性無二。無二之性即是実性。今悟明暗不二故見実性。(大正四二・八一—八二下)

と述べており、「見実性」の用例をみいだすことができる。

ここで引用されている一節は言うまでもなく『涅槃經』如来性品よりの引用であるが、⁽⁹⁾この一節は吉蔵の他の著書中にも多く引用されており、⁽¹⁰⁾吉蔵が非常に好んで用いる一節であるということが出来る。ここで「見実性」の示す意味は無二之性を了達することであり、実性を悟ることであると云える。この無二実性についてであるが、『維摩經義疏』卷第五には、

若了悟無明実性即是捨明。故云不二。若見明無明。便是無明。(大正三八・九七六下)

とあり、「了悟無明実性」と説かれている。この箇所は『維摩經』卷中「入不二法門品」の一節⁽¹¹⁾について解釈した箇所であり、実性を了悟してこそ不二法門に入ることができると述べられている。

このように、吉蔵は「見仏性」と「見実性」とを述べているのであるが、吉蔵の著書『百論疏』卷上之上には、

実性者諸中道仏性也。(大正四二・二三九中—下)

とあり、実性とは仏性の意味であることが説かれているのである。すなわち、見仏性と見実性とは同じ意味であるという

ことができる。さらに言えば、吉蔵の説く「見性」とは「見仏性」の意であり、「見実性」の意であり、「見無二之性」の意であるといふことができる。また、吉蔵は著書中、

(1) 若見因縁名見仏。見仏即見仏性涅槃。(中觀論疏卷第六末、

大正四二・九六中)

(2) 涅槃經見縁起為見法。見法為見仏。見仏見仏性。(同右・

卷第十本、大正四二・一五四中)

(3) 涅槃云。見縁起為見法。見法即見中道。見中道即見仏亦

見仏性。(十二門論疏卷上之本、大正四二・一八三中)

と説かれており、これらの吉蔵の主張をみるかぎり、「見性」とは「見因縁」の意であり、「見仏」の意であり、「見涅槃」の意であり、「見縁起」の意であり、「見中道」の意であると言ふことができ、深い意味を含んだ言葉であることが理解される。⁽¹³⁾

(三)

すでに述べたとおり、吉蔵の説く見性には多くの意味が込められているのであるが、吉蔵はまた、『法華玄論』卷第三では「即是除煩惱見仏性也。」(大正三四・三八八中)、『中觀論疏』卷第十末では「見仏性畢竟清淨無有煩惱」(大正四二・六一上)と述べており、見仏性とは煩惱がなくなったことを意味している。そして『法華義疏』卷第十では「能見真如仏

性名得菩提。」と説かれており、また『法華玄論』卷第七には「成仏必須見仏性」(大正三四・四二〇下)、『十二門論序疏』には「見仏性方得成仏」(大正四二・一七一中)と説かれていることから、見仏性とは菩提を得ることであり、成仏することの意味する。それ故、『法華遊意』『中觀論疏』卷第五末では「夫見仏性方得常身」(大正三四・六四二中)、「見仏性有常樂我淨也。」(大正四二・八八上)と説かれており、仏性を見れば常身を得ることができ、常樂我淨の四徳を得ることができ。

このように、見仏性とは煩惱を除き、菩提を得ることであり、成仏して常樂我淨の四徳を得ることであると説かれているのであるが、吉蔵は特にその典拠を示していない。見仏性の語が『涅槃經』に頻出する言葉であることは周知のことであるが、吉蔵は『涅槃經』に精通していることから、『涅槃經』の説を参照していることは当然ながら考えられることである。

まず、吉蔵の説く「除煩惱見仏性」についてであるが、『涅槃經』卷第十八に、

以不_レ生煩惱故。則見_ニ仏性。(大正一二・七二三下)

とあり、また卷第三十三に、

若無_ニ煩惱一切衆生_ニ當_レ了_レ現見_ニ仏性。(大正一二・八一八下)とあることから、『涅槃經』によるものと考えられる。

次に吉蔵の説く「能見真如仏性名得菩提。」についてであ

るが、『涅槃經』卷第七に、

因_レ見_二仏性_一得_レ成_三阿耨多羅三藐三菩提_一。（大正一二・六四六上）

とあり、これに類した表現が他にも何箇所かみられることからも、⁽¹⁴⁾これらに依ったものと考えられる。

そして吉蔵の説く「見仏性有常樂我淨」についてであるが『涅槃經』卷第十五に、

菩薩摩訶薩見_二仏性_一故得_二常樂我淨_一。（大正一二・七〇七上）

とあり、この他にも何箇所かに説かれていることから、⁽¹⁵⁾これらに依ったものと考えることができ。

このように説かれる見仏性について、吉蔵はまた、『中觀論疏』卷第五末では、

凡夫説三。聞三作三解。不知三三。亦不知三三。不知三三三故無実慧方便。不三三三故無方便実慧。既無二慧豈有自然無師四智耶。是故凡夫但有無明不見仏性。無常樂我淨。聖人明三。知是不三三亦識三不三具四智。無復無明故見仏性有常樂我淨也。

（大正四二・八八上）

と述べており、二を分別する凡夫は見仏性を得ることができなく、無二無分別の聖人こそが見仏性を得ることができると述べている。また『金剛經義疏』卷第四には、

雖常有真如仏性。心無所住則見。有所住則不見也。……中略……有住布施則不見如。無住布施則便見如。（大正三三・一一六下）

とあり、心が有所住、有住であれば見仏性を得ることができ

なく、心が無所住、無住であれば見仏性を得ることができると説かれている。⁽¹⁶⁾

分別の凡夫、心有所住の人は見仏性を得ることがなく、無分別の聖人、心無所住の人が見仏性を得るのであるが、さらに吉蔵は著書中、

(1) 如涅槃經云十地菩薩名聞見仏性。唯仏得名眼見仏性。

（法華義疏卷第三、大正三四・四八九下）

(2) 今明如涅槃經云。十住菩薩有所住故見不了了。諸仏如来

無所住故見則了了。（同右、大正三四・四九〇上）

(3) 大經云。唯仏名眼見仏性。十地以還。皆稱聞見。則唯仏

斷惑。爾前不斷也。（淨名玄論卷第五、大正三八・八八九上）

(4) 十地已還見仏性未明法身未現故不得授。見性明了法身顯

現記也。（法華玄論卷第七、大正三四・四二〇下）

(5) 如云初地猶有法我執。乃至十地菩薩見法有性故見仏性不

了。亦言住十住故見不了了也。（中觀論疏卷第八本、大正四

二・一一六上）

と述べており、完全な見仏性を得ることができるのは仏のみであると説かれている。すなわち、仏は心無所住のため眼見仏性であり、完全な見仏性を得ることができるとされる。それに対し十地の菩薩、十住の菩薩は心有所住のため聞見仏性であり、その見仏性は不完全であると説かれている。⁽¹⁷⁾なお、その根拠として吉蔵は『涅槃經』卷第二十五「師子吼菩薩品」

第二三之一

見有二種。一者眼見。二者聞見。諸仏世尊眼見仏性。(如於中觀阿摩勒) 十住菩薩聞見仏性故不了了。(大正一二・七七二中)

と説かれる箇所を引用している。この箇所を引用する吉蔵の態度は一貫しており、諸仏世尊は眼見仏性、十住菩薩は聞見仏性とする説で統一している。しかし『涅槃經』の他の箇所卷第二六「師子吼菩薩品」第二三之一には、

(1) 復有眼見。諸仏如来十住菩薩眼見仏性。復有聞見。一切衆生乃至九地聞見仏性。(大正一二・七七二下)

(2) 眼見者謂十住菩薩諸仏如来眼見衆生所有仏性。聞見者一切衆生九住菩薩聞有仏性。(大正一二・七七五上)

とあり、この説によれば眼見仏性を得ることができるのは諸仏如来と十住菩薩であり、聞見仏性は九住菩薩以還であると説かれている。このように眼見仏性、聞見仏性について、涅槃經中、異なった二説が説かれているのであるが、吉蔵は前者の説のみを採用しており、吉蔵の一貫した立場を伺い知ることができ(18)。

吉蔵の説く見性は以上の如くであるが、その見性を得る方法について吉蔵は著書中、

(1) 離断常二見。行於聖中道。見於仏性。(二諦義卷上、大正四五・八六上)

吉蔵における見性思想の考察(粟谷)

(2) 謂坐道場時始見仏性也。(法華義疏卷第四、大正三四・五〇六上)

(3) 坐道場見仏性方得成仏。(十二門論序疏、大正四二・一七一中)

と述べており、断常の二見を離れ中道を行ずること、そして道場に坐すことの実践行を強調しているのである。ここに実践修行を重視する吉蔵のすがたをみいだすことができる。

(四)

吉蔵の説く見性については以上に述べたとおりであるが、吉蔵以前にも見性が説かれていたことは伊藤隆寿氏の論文「見性の歴史的考察」(19)の中で指摘されている。論文中、吉蔵以前の著書をいくつかあげられているが、吉蔵の見性思想を述べるためにも一考の必要があると思われる。

まず最初に『涅槃經集解』についてであるが、この『涅槃經集解』に見性成仏の句が説かれていることは忽滑谷快天氏によってすでに指摘されていることである(20)。すなわち『涅槃經集解』卷第三三に、

僧亮曰。見性成仏。即性為仏也。(大正三七・四九〇下)

とあり、見性成仏と成句で用いられている。見性成仏の語は一箇所のみにとどまるのであるが、見性の語は他の箇所の処々にみいだすことができる。すなわち、

(1) 終能見性。是故皆名善業義也。(涅槃經集解卷第一八、大正三七・四四七下)

(2) 慧誕曰。將欲勸人見性。以成善業。(同右・卷第一九、大正三七・四五五中)

(3) 僧亮曰。虛空譬仏。雷譬涅槃經。牙譬衆生。花譬見性也

(同右・卷第二〇、大正三七・四六二中)

(4) 至乎十地行滿之時。所離障薄。于時。始復髣髴見性八自在我空也。(同右・卷第二〇、大正三七・四六二下)

(5) 僧亮曰。草譬凡聖仏性也。牛譬後身菩薩也。牛食草即成醍醐。譬後身見性。即成仏也。(同右・卷第六六、大正三七・五八七上)

と説かれていようように、見性の語をみいだすことができる。

『涅槃經集解』に説かれる見性は当然のことながら、見仏性の意味であるが、見仏性の用例もまた多くみいだすことができる。卷第十九には、

僧宗曰。見仏性者。治生死之病。(大正三七・四五三中)

とあり、卷第五五には、

若能破三種惑。見諦思惟無明住地。煩惱都盡。則見仏性也。(大正三七・五五一上)

とあり、見仏性とは生死の病が癒え、煩惱がすべて尽きたことを意味している。次に卷第一八には、

若見仏性。則成仏也。(大正三七・四四八下)

とあり、前述の「見性成仏」あるいは「後身見性。即成仏也」との例より考え合せれば見性が成仏を述べたものであることは明らかである。さらに述べると、卷第五三には、

即見仏性入於涅槃。(大正三七・五四一下)

とあり、卷第六〇には、

若具此十法。則能見仏性。得無相涅槃也。(大正三七・五六五中)

とあり、見仏性により涅槃を得ることができると説かれている。⁽²¹⁾

ところで、吉蔵の見性を論じた箇所述べたことであるが『涅槃經』には見仏性に二種あると述べ、眼見仏性と聞見仏性の二種を説いている。この両者の境界として、第一に仏のみが眼見仏性、十地菩薩以還は聞見仏性とする説、第二に仏と十住菩薩とが眼見仏性、九地以還は聞見仏性とする説との二説が説かれている。この問題に関して『涅槃經集解』では

(1) 法瑤曰。上明仏性難見。十住猶不明了。唯仏能見。(卷第二一、大正三七・四六四上)

(2) 法瑤曰。十住菩薩。要聞涅槃。乃得髣髴少見仏性。(卷第二〇、大正三七・四六二下)

(3) 十住菩薩見仏性未明了。(卷第四五、大正三七・五一六下)

(4) 知唯仏一人。独了了窮。鑒此十二因縁。得見仏性。(卷第五四、大正三七・五四九上)

とあり、前に示した『涅槃經』の二説のうち、前者の説のみ

をあげている。すなわち十住菩薩の見仏性は未だ不明了であると述べ、了了として見仏性を得ることのできるのは仏のみであると述べている。ここに『涅槃經集解』の一貫した主張を汲み取ることができる。

なお、巻第五一には「修中道解。見仏性也。」(大正三七・五三二下)とあり、見仏性を得るためには中道を修する実践行の必要があると説かれている。

(四)

伊藤論文中、『涅槃經集解』につづき見性の用例が指摘されている。浄影寺慧遠の著書『涅槃經義記』、『大乘義章』に説かれる見性についてであるが、著書中、

(1) 明知我於無量劫来已見仏性。已見性故。先有仏眼。(涅槃經義記卷第一、大正三七・六三三上)

(2) 以是了了得見性者。仏性は其因縁之本。故仏如来見始知終名見仏性。(同右・巻第八、大正三七・八二七下)

(3) 彼経言。諸仏如来知一切法無常與苦無我不淨。知非一切常樂我淨。以是義故見性了了。(大乘義章卷第一八、大正四四・八二一中)

(4) 如来仏眼見性窮極。(同右・巻第二〇本、大正四四・八五四下)

とあり、見性の用例をみいだすことができる。⁽²³⁾ここに示した

吉蔵における見性思想の考察(粟谷)

見性の用例は見仏性を意味することは一見して明らかである。慧遠の著書を一瞥するに、見仏性の用例が多いことは言うまでもないが、『維摩經義記』巻第四本では、

仏眼見法実性。(大正三八・四九八中)

とあり、『大乘義章』巻第九には、

凡夫二乗於実未見。一切所行通名為福。諸仏菩薩見実性故。一切所行通名為智。(大正四四・六五〇下)

とあり、同・巻第二〇本には、

照見真実如来蔵性名為仏眼。(大正四四・八五二上)

とあり、⁽²⁴⁾見実性、見真実如来蔵性といった用例をもみいだすことができる。慧遠の説く見性にこれらの意味も含まれると考えられる。

慧遠の説く見性について更に述べるならば、『涅槃經義記』巻第六には、

仏得成菩提見於仏性。一切衆生不得菩提不見仏性。(大正三七・七八五下)

とあり、同・巻第八には、

衆生煩惱覆故不見仏性不得涅槃。即顯断故能見仏性得大涅槃故名為常。(大正三七・八四一下)

とあり、また『大乘義章』巻第一八には、

彼言。⁽²⁵⁾菩薩不見仏性断煩惱故。所得涅槃但有楽淨而無我常。故名大。諸仏見性而断煩惱。所得涅槃常楽我淨。故名為大。(大正

四四・八二七下）

と説かれている。すなわち見仏性とは煩惱を断ずることであり、菩提を得ることであり、涅槃を得ることであり、常楽我淨の四徳を得ることである。

前にも述べたように『涅槃經』では眼見仏性と聞見仏性とが説かれており、兩者の境界について二説を示している。この問題に関して慧遠の著書『涅槃經義記』卷第八では、

十住菩薩慧眼見故不得明了。慧眼見空不見実故。仏眼見性故得明了。……中略……十住菩薩智慧因故見性不了。仏断因果故得了了。……中略……十住不能覚一切法見性不了。仏覚一切故得了了。（大正三七・八三二上）

とあり、仏の見性は完全であるが、十住菩薩の見性は不完全であると述べている。すなわち仏と十住菩薩との間に一線を画している。しかし、同書の他の箇所においては、

(1) 仏與十地同為眼見故得了了十住菩薩眼見自身得菩提故。

九地已還是其聞見。（涅槃經義記卷第八、大正三七・八三二中）

(2) 仏及後身眼見仏性顯法成身。常随法身彼有之。九地菩薩

雖未眼見聞見明了。（同右・卷第九、大正三七・八六九中）

とあり、仏と十地菩薩とは眼見仏性、九地以還は聞見仏性であると述べている。この問題に関して『大乘義章』卷第九には、

如涅槃説。初至九地聞見仏性未能眼見。（大正四四・六五〇下）とあり、同・卷第一八には、

十地以上眼見仏性顯法成身。（大正四四・八二五上）

とあり、十地以上は眼見仏性、九地以還は聞見仏性であると述べている。しかし、同・卷第二〇には、

地前菩薩聞見仏性。以聞見故名大声聞。地上菩薩眼見仏性。以眼見故説之為證。若依涅槃。九地已還聞見仏性。十地眼見而未明了。但見自身所有仏性。不見衆生。故不了。又於自身十分見一。故名不了。如来仏眼見性窮。（大正四四・八五四下）

とあり、まず地前菩薩は聞見仏性、地上菩薩は眼見仏性であると述べ、さらに『涅槃經』の説として九地已還は聞見仏性、十地以上は眼見仏性であると述べている。仏と十地菩薩とは眼見仏性であると述べながらも十地菩薩の眼見仏性は未だ不完全であり、仏の眼見仏性のみが窮極であると述べている。

すなわち慧遠が『涅槃經』の説として採用しているのは仏と十地菩薩とを眼見仏性、九地以還を聞見仏性とする説であり、さらに仏と十地菩薩との間にも一線を画している。この慧遠の説は『涅槃經』中に説かれている二説を融合した説であると考えられる。そして『涅槃經』の説とは別に地前菩薩を聞見仏性、地上菩薩を眼見仏性とする説をも採用している。この説は前に述べた『涅槃經集解』にはみられない説で

ある。

なお見性を得るための方法についてであるが、『涅槃經義記』卷第八には「仏菩薩有行有眼能見仏性」（大正三七・八四一中）とあり、『大乘義章』卷第一二には「涅槃經說。為見仏性修行六度。」（大正四四・七〇八中）とあり、六波羅蜜を修する実践行が必要であることを説いている。

(六)

ところで、本論文では見性について述べているのであるが、吉蔵著書中、見性や見仏性の用例とは別に顕性、顕仏性の用例をみいだすことができる。すなわち『百論疏』卷中之上には、

此我無我並是仏性所離。除此我無我見始得顕仏性。（大正四二・二

六一中）

とあり、『金剛經義疏』卷第四には、

雖常有眞如仏性。心無所住則見。有所住則不見也。顕性之言事在

斯也。（大正三三・一一六下）

と説かれている。⁽²⁷⁾ 後者の例をみれば、顕性とは見眞如仏性を述べたものであることは明らかである。また『法華統略』卷第五には、

明仏性隠顕者如力士額珠為隠。後見為顕。所以明隠顕。（統蔵一

四三―七九右）

吉蔵における見性思想の考察（粟谷）

と説かれており、この箇所をみるかぎり、吉蔵が「顕」を用いる場合、「見」の意味が含まれていることは明らかである。ところで、この顕性についてであるが、吉蔵の著書『金剛經義疏』卷第一には、

自北土相承流支三蔵具開經作十二分積。一者序分。二者護念付属分。三者住分。四者修行分。五者法身非有為分。六者信者分。七者格量分。八者顕性分。九者利益分。十者断疑分。十一者不住道分。十二者流通分。（大正三三・九〇下）

とあり、北土相承十二段分科説の第八段に顕性分が説かれていると述べられている。吉蔵は十二分積を北土相承菩提流支の説として紹介しているのであるが、この十二分積は金剛經の注釈書である『金剛仙論』にもみいだすことができる。すなわち同・卷第一に、

如是已下訖於經末。正辨經體。序正流通義如常辨。於中隨義曲分。凡有十二段。始從序分終訖流通。即其事也。（大正二五・八〇〇上）

とあり、吉蔵の言っている北土相承菩提流支説の十二分積とは『金剛仙論』に説かれている十二段分科を指すものと思われる。⁽²⁸⁾ この問題についてはすでに『印仏研究』で論じたことであるが、吉蔵著書中、数度に亘って『金剛仙論』を引用していることから理解できることである。⁽²⁹⁾

そこで『金剛仙論』に説かれている顕性分をみるならば、

(1) 明修行見性成道證無為法身時。果頭所得功德不可限量。

(同・卷第六、大正二五・八四三上)

(2) 明依經修行見性功德。非算數法。不可限量。(同・卷第六、

大正二五・八四三中)

(3) 今明見性會無為法身時。得無量無辺功德。不可限量。

(同右、大正二五・八四三下)

とあり、顯性分中に見性の語をみいだすことができるのである⁽³¹⁾。そして論中、

真如仏性雖復一切衆生有之平等。明諸仏菩薩修行斷惑故。能見性。

一切衆生未能修行斷惑故。所以不見也。(卷第六、大正二五・八

四二上)

とあり、また、

明依此金剛般若及諸大乘經受持誦三種修行成就勝業。以此方便

萬行為因。能見仏性。(卷第六、大正二五・八四三上)

とあり、見仏性の用例をもみいだすことができる。これらの例よりみれば見性が見仏性を意味することは明らかである。

その見性は実践修行により惑を断じて得ることができ、見性の功德は計り知ることができないと説かれている。

なお眼見仏性と聞見仏性との境界についてであるが、『金剛仙論』卷第二には、

如涅槃經云。十地菩薩眼見仏性。九地已還名為聞見。然九地已下亦分有眼見。但以下形上。云九地為聞見。非是全不見見。何以得

知。又即云唯仏一人眼見仏性。十地已下皆名聞見。以此驗知。亦得言初地以上眼見仏性。地前凡夫名為聞見。此皆就人有上下迭相形奪。(大正二五・八〇六中)

とあり、第一に十地菩薩を眼見仏性、九地以還を聞見仏性とすする説、第二に仏のみを眼見仏性、十地以還を聞見仏性とすする説、第三に初地以上を眼見仏性、地前凡夫を聞見仏性とすする説の三説をあげている。周知の如く前の二説は『涅槃經』に説かれる二説であるが、『金剛仙論』では前二説により第三説を導きだしているようにも思われる。『金剛仙論』卷第六の顯性分中には、

以凡夫二乘取著行故。不能見真如仏性也。餘者有智得者。明入地以上菩薩及諸仏如来得出世勝解。能見此仏性也。(大正二五・八

四二中)

とあり、入地以上が見仏性を得ることができると説かれている。先の箇所とこの箇所とを合せ考えるならば、『金剛仙論』の立場は初地以上を眼見仏性、地前を聞見仏性とする立場であるように思われる。

(七)

以上、吉蔵の説く見性と吉蔵以前に説かれた見性について述べてきたのであるが、それぞれの説を比較するならば、相互の間に類似点、相違点をみいだすことができる。

まず、吉蔵の説く「見仏性方得成仏」という問題についてであるが、『涅槃経』中、見仏性により成仏を得ることができるといふ言い方はみいだすことができず、また『金剛仙論』『涅槃経義記』『大乘義章』等にもみいだすことができない。ただ『涅槃経集解』にのみ「見性成仏」「若見仏性。則成仏也。」といった言い方をみいだすことができる。

次に、見性を得るための実践行についてであるが、『涅槃経』巻第二六には、

若有受持菩薩戒者。當知是人得阿耨多羅三藐三菩提。能見仏性如来涅槃。(大正一二・七七四上)

とあり、巻第二七には、

修習道者為見仏性。(大正一二・七八三下)

とあり、菩薩戒の受持、道の修習が説かれている。前述の如く『金剛仙論』では「方便萬行」、『涅槃経集解』では「修中道解」、慧遠著書中では「修行六度」といった実践行が説かれている。これらに比し、吉蔵は「坐道場時始見仏性也。」と述べており、従来にはみられない独自の修行法を説いている。⁽³²⁾

次に、眼見仏性と聞見仏性との境界、了了見と不了見との境界についてであるが、吉蔵以前の著書では、

		眼見仏性	聞見仏性
『涅槃経』	① 仏 ② 仏、十地	① 十地以下 ② 九地以下	
『金剛仙論』	① 地上 ② 仏、十地 ③ 仏	① 地前 ② 九地以下 ③ 十地以下	
『涅槃経義記』 『大乘義章』	① 地上 ② 仏、十地 ③ 仏	① 地前 ② 九地以下 ③ 十地以下	
『涅槃経集解』	仏	十地以下	

と示される如くである。吉蔵の立場は仏のみを眼見仏性、十地以下を聞見仏性とする立場であり、『涅槃経集解』の立場と一致する。この問題について吉蔵は『大乘玄論』巻第三に十住菩薩。方見仏性猶如羅穀。九地以還未見仏性。但華嚴經云初發心時便成正覺。若如此者。初發心時則見仏性。故一師云。涅槃所明十地。応是地前。未得真悟菩薩故。見性不明。而華嚴所明十地。從仏智慧出。此是真悟菩薩。故云初發心時便成正覺。(大正四五・四一中)

と述べており、法朗の説を引用して自らの立場を明確にしている。

このようにみてくると、吉蔵説は『涅槃経集解』の説と類似点をみいだすことができるのであるが、『涅槃経集解』には

吉蔵の見性門の如き項目が説かれていない。この点より述べれば『金剛仙論』には顕性分という項目があり、吉蔵が注目したことは当然考えられる。この『金剛仙論』の十二分科について、『金剛経義疏』巻第一には、

此十二分爲出般若經文。爲是婆藪論積。今所觀經論悉無斯意。蓋是人情自穿鑿耳。（大正三三・九一上）

とあり、十二分科について批判している。しかし、巻第四には、

雖常有真如仏性。心無所住則見。有所住則不見也。顕性之言事在斯也。今明作此意亦義無失。（大正三三・一一六下）

とあり、見性の義については無失であることを述べている。すなわち、吉蔵の説く見性思想は『涅槃経』を典拠の經典として、『涅槃経集解』の説を踏み台としながらも、顕性分を独立項目として論じた『金剛仙論』に刺激され、三論伝統説に従いつつ、独自の見性思想へと発展していったと考えることができる。

注

- (1) 常盤大定著『支那仏教の研究』第二（昭和一六年十一月、春秋社）三五二―三八〇頁参照。
- (2) 『印仏研究』第一六巻第一号、昭和四二年
- (3) 『印仏研究』第一七巻第一号、昭和四三年
- (4) 『三蔵』第一六一、第一六二号、昭和五三年

- (5) 吉蔵の思想と神会との関係を述べた論文に平井俊栄「八無住」の概念の形成と展開」、『中国般若思想史研究』六六―九一―六八八頁）、拙稿「吉蔵著書中にみられる見性思想」（駒沢宗学研究第二三三号、昭和五六年）、末光愛正「吉蔵の一乗思想」（駒沢仏教学部論集第一三三号、昭和五七年）等がある。
- (6) 鈴木哲雄「荷沢神会より壇経に至る見性の展開」に「後世宋朝禅との脈絡を保ちながら、見性なる語を用いた最初の人神会である。」とある。
- (7) 伊藤隆寿「見性の歴史的考察」（駒沢宗学研究第一五号、昭和四八年）参照。
- (8) 拙稿「吉蔵著書中にみられる見性思想」（駒沢宗学研究第二三三号、昭和五六年）参照。
- (9) 『涅槃経』巻第八に「若言無明因縁諸行。凡夫之人聞已分別生三法想。明與無明。智者了達其性無二。無二之性即是実性。」（大正一二・六五一下）とある。
- (10) この一節は吉蔵が好んで用いる一節であり、少しの例をあげれば、『中観論疏』巻第一本（大正四二・九上）、同・巻第二本（大正四二・二六下）、同・巻第五末（大正四二・八一―下）、同・巻第九末（大正四二・一三九中）、同・巻第十末（大正四二・一五八下）等々に引用されている。
- (11) 『維摩経』巻中「明無明爲二。無明実性は明。明亦不可取離一切数。於其中平等無二者。是爲入不二法門。」（大正一四・五五一上）
- (12) 『涅槃経』巻第二五「善男子。是故我於諸経中説。若有見十二縁者即是見法。見法者即是見仏。仏者即是仏

性。」(大正一二・七六八下)

(13) これらの例より吉蔵が如何に見を重視しているかが理解される。吉蔵の見る思想については、拙稿「吉蔵における見る思想」(駒沢宗学研究第二四号、昭和五七年)参照。

(14) たとえば『涅槃經』卷第二には「見_レ仏性。得_レ阿耨多羅三藐三菩提。」(大正一二・六一一下)とあり、同・卷第二七には「見_レ仏性_二者_一為_レ得_レ阿耨多羅三藐三菩提_一故。」(大正一二・七八三下)とある。

(15) たとえば『涅槃經』卷第二三には「見_レ仏性_二故_一得_レ名_一為_レ常樂我淨。」(大正一二・七五八下)とあり、同・卷第二七には「見_レ仏性_二者_一為_レ得_レ阿耨多羅三藐三菩提_一故。……中略……断_レ於生死_二乃_一至断_レ諦。為_レ得_レ常樂我淨_一法_二故_一。」(大正一二・七八三下)とある。

(16) また『大乘玄論』卷第一には「小乗觀行。先有法体折法入空。故但見於空不見不空。今大乘觀相待者。不立法体。諸法本来不生。今即無滅。初念為無礙道。後念為解道。是故經言。不但見空。亦見仏性不空。」(大正四五・一八下)とあり小乗は不見仏性、大乘は見仏性と述べている。

(17) 『勝鬘寶窟』卷下之本には「十住菩薩。見法有性。故不見仏性。」(大正三七・七三中)とあるが、本文中の「十地菩薩見法有性故見仏性不了。」という例からも、十住菩薩の見仏性が不完全であることを述べたものと思われる。なお『涅槃經』卷第二四には「一切菩薩住_三九地_一者見_三法有性_一。以_三是見_一故不_レ見_三仏性_一。」(大正一二・七六五下)とあり、吉蔵の説と異なっている。

吉蔵における見性思想の考察(粟谷)

(18) 『涅槃經』卷第二一には「声聞緣覺至_三十住菩薩_一不_レ見_三仏性_一。名為_三涅槃_一。非_三大涅槃_一。若能了_レ見_三於仏性_一。則得_三名為_三大涅槃_一也。」(大正一二・七四六中)とあり、十住菩薩は不見仏性であると説かれている。

(19) 駒沢『宗学研究』第一五号、昭和四八年。

(20) 忽滑谷快天著『禅学思想史』上卷(大正一二年)三五七―三五八頁参照。

(21) 『涅槃經集解』卷第五一には「僧亮曰。答第二難也。明仏性故。得名常樂。」(大正三七・五三四中)とあり、見仏性の故に常樂と名づけることができるかと説かれている。

(22) 南本『涅槃經』卷第二五「諸仏世尊見_三一切法無常無我無樂無淨_一。非_三一切法見_三常樂我淨_一。以_三是義_一故。見_三於仏性_一。」(大正一二・七七〇上)、北本『涅槃經』卷第二七(大正一二・五二五中)参照。

(23) 本文中の例以外にも、『涅槃經義記』卷第一には「謂仏如来見性窮極。名第一義。」(大正三七・六三二中)とあり、『大乘義章』卷第一四には「見性_三十法如涅槃_一説。」(大正四四・七五三下)とあり、同・卷第一八には「十住形前見性。故説有常。」(大正四四・八二五中)とあり、慧遠著書中処々に見性の語がみいだせる。

(24) 本文中の例以外にも、『大乘義章』卷第一二には「見_三実性_一故説為智分。」(大正四四・七〇六上)とあり、同・卷第一には「便見_三眞実如来藏性_一自体法界秘密法門。」(大正四四・四八六中)とある。

(25) 南本『涅槃經』卷第二三「不_レ見_三仏性_一而断_三煩惱_一。是名_三涅槃_一」

繫非^二大涅槃。以^レ不^レ見^二仏性^一故無^レ常無^レ我唯有^二染淨^一。以^レ是義^一故。雖^レ断^二煩惱^一不^レ得^二名為^二大般涅槃^一也。若見^二仏性^一能断^二煩惱^一。是則名為^二大般涅槃^一。以^レ見^二仏性^一故得^二名為^二常樂我淨^一。以^レ是義^一故。断^二除煩惱^一亦得^二亦稱為^二大般涅槃^一。」（大正一二・七五八下）、北本『涅槃經』卷第二七参照。

(26) 『法華玄論』卷第九にも「菩薩猶是無常未免三世之法。故就三世中修行。欲顯中道仏性非三世法。是故菩薩三世欲顯無三世義也。」（大正三四・四四〇下）とあり、『大乘玄論』卷第三にも「以^レ仏性為法身。修行顯仏性為報身。化衆生義為化身。」（大正四五・四五下）とあり、顯仏性が説かれている。

(27) 『金剛經義疏』卷第一にも「持説之人所以功德無辺必由仏性。若不識於仏性則無此功德。故有顯性分。」（大正三三・九一上）とあり顯性の語をみいだせる。

(28) 『金剛仙論』に説かれる十二分積の個々の名称をあげるならば、①所以初明序分者。（金剛仙論卷第一、大正二五・八〇〇中）、②第二段經名為善護念分也。（同、大正二五・八〇二下）、③第三段經名為住分。（同・卷第二、大正二五・八〇四中）、④第四如実修行分也。（同・卷第二、大正二五・八〇七中）、⑤第五名如来非有為相分。（同・卷第二、大正二五・八一〇下）、⑥第六名為我空法空分也……中略……亦得名有能信者分。（同・卷第三、大正二五・八一二上）、⑦第七具足功德校量分。（同・卷第四、大正二五・八二〇中）、⑧第八分。明一切衆生有真如仏性。（同・卷第六、大正二五・八四一下）、⑨第九名為利益分。（同・卷第七、大正二五・八四四上）、⑩第十名為断疑分。（同・卷第七、大正二五・八四六中）、⑪第

十一段經。名為不住道分。（同・卷第十、大正二五・八七二中）、⑫第十二流通分經。（同・卷第十、大正二五・八七四中）。

(29) 拙稿「吉蔵撰『金剛經義疏』における問題」（印仏研究第三〇巻第二号、昭和五七年三月）参照。

(30) たとえば『仁王經疏』卷第一には「今依金剛仙論作六句分別。……」（大正三三・三二六上）とあり、同・卷第一には「若依金剛仙論明三種阿難。……」（大正三三・三一六下）とあり、同・卷第二には「依金剛仙論明八部般若。」（大正三三・三二二上）とある。

(31) 『金剛仙論』中、顯性については巻第五の「十地行滿金剛心後。顯性本有。名法仏。」（大正二五・八二七下）とある箇所、巻第七の「明修行因縁顯真如法性。」（大正二五・八五一上）とある箇所が指摘できるところとどまる。

(32) 拙稿「吉蔵著書中にみられる見性思想」の中で述べたように、『南陽和尚問答雜微義』には「先須學坐修定。得定已後、因定發慧（以智歐）故、即得見性。」（神会和尚遺集四四八頁）とあり、學坐修定により見性を得ることができるとする説は、他の説と比較した場合、吉蔵の説く「坐道場時始見仏性也。」という説と最も類似している。